

元バレーボール日本代表
スポーツキャスター

大林 素子 さん



大林素子さんといえば、元バレーボール日本代表の中心選手として大活躍されていたことは記憶に新しい。現在はスポーツコメンテーターやタレントとして活躍中だが、最近では日本演劇の舞台にもチャレンジする等、その活動の場をひろげている。また大林さんは、小さい頃から歌や踊りが大好きだったとのことだが、特に宝塚歌劇団の大ファンとのことで、インタビューの際も、宝塚談義でひとしきり盛り上がっていた。そんな大林さんに、司法や弁護士に対する思いについてお話を伺った。

(聞き手・構成：深町周輔)

小さい頃から大きくて居場所のなかった私にとって、バレーボールとは、自分が生きていくために必要な場所だったんです。

——バレーボールを始めるようになったきっかけを教えてください。

私は、もともと小さい頃は歌手になるのが夢でした。でも、すでに小学校6年生の時から170cmありましたので、身長のことでもよく学校でいじめられていました。

そのため、家に引きこもってテレビを見るのが小学校時代の楽しみだったんですが、ちょうどその頃、テレビアニメで「アタックNo.1」をやっていたんです。これを見て「バレーボールをやればいじめられずにすむ」と思ったのが、バレーボールを始めたきっかけですね。

——現役時代は常に第一人者として活躍されていましたが、バレーボールから得たものを教えてください。

私は29歳で引退するまでバレーボール一筋でしたが、私にとってバレーボールは、好きで始めたというよりも、小さい頃から大きくて居場所のなかった自分が生きていくために必要な場所だったんです。ですから、好きとか嫌いとかという感覚の中でプレーしたことはなく、バレーボールで何かを得たというよりも、むしろ私の存在＝バレーボールという気持ちでしたね。

もともと、バレーボールを通じて自信をもてるようになったことや、色々な人と知り合うことができたことは、バレーボールで得られた財産といえるかもしれません。

——今までは生活の一部だったバレーボールを引退するときの心境は？

私の場合は、目標だったオリンピックにも3回出させていただき、セリエAでプロになることもできて、メダルこそ取れなかったものの、それ以外は達成して完全燃焼した感がありました。

ですから、現役に残りたいということも無くて、最後の大会が終わったので、はい、バレーボールは終わり、という自然な流れで引退できました。

それに、そういったことを考える間もなく、その日のうちにテレビの仕事も入っていましたので(笑)。

——引退後はスポーツキャスターとして活躍されていますが、現役時代と比べて苦労は多いですか。

まったく違う分野ですので単純に比較はできませんが…、現役時代は命をかけてやっていたというか、特

にオリンピックくらいの大会になると、負けたら日本に帰れないよねという気持ちでやっていました。

今のお仕事は、命をかけるということこそありませんが、また違った苦労がありますね。バレーボールの場合は自信がある中での苦労でしたけれども、舞台やバラエティー、クイズ番組等はこれまで専門としてやってきたわけではないので、それぞれ日々勉強と思いつながら頑張っています。

—宝塚歌劇団の公演観劇が趣味とうかがいましたが、宝塚歌劇団のこういったところに魅力を感じますか。

もともと私は小さい頃から歌とか踊りが好きだったのですが、宝塚を観劇するようになったのは、1988年のソウルオリンピックの際、宝塚の花組にいた白帆まりさんからファンレターをいただいたのがきっかけです。

オリンピックが終わった後、少し休みがあったので、白帆さんから誘われて「新源氏物語」や「ロマノフの宝石」を観劇したのですが、それ以来、すっかりハマってしまいました。

宝塚は、苦しい練習の合間に現実を忘れさせてくれる、私の元気の源です。

—ところで、今までの仕事で弁護士とかかわりを持つことはありましたか。

良い意味でも、悪い意味でも、お世話になったことはないです（笑）。ただ、テレビ番組の仕事では弁護士さんとお会いすることはあります。皆さん強烈な方で、おもしろいばかりですね。

—2年後には裁判员制度が始まりますが、裁判员についてどう思われますか。

興味はすごくあります。ただ、実際にその立場になってみると気持ちは色々揺れ動くと思うんです。当事者に不利な判断をした場合に逆恨みされるんじゃないかとか、そこまで自分に責任ある判断ができるのかとか。そういったことを考えると、簡単にできることではないですね。

それと、守秘義務の問題もありますね。どこまで話して良いのか、どこからダメなのか、区別が難しいですね。それに、あちこちから話を聞かせて欲しいと言われることもあるでしょうし、家族に相談したくなることもあるでしょうし、秘密を守るということはずごく大変なことだと思います。



プロフィール おおばやし・もとこ

中学1年からバレーボールを始め、中学3年の時に東京都中学選抜に選出。その後、高校バレーボール界の名門八王子実践高校に進む。1986年日立入社、88年ソウル五輪、92年バルセロナ五輪に出場。95年イタリアセリエA・アンコーナに所属、日本人初のプロ選手となる。帰国後、東洋紡オーキスに所属、96年アトランタ五輪出場後、97年引退。現在、日本スポーツマスターズ委員会シンボルメンバー、日本スポーツ少年団委員、VAS（バレーボールアドバイザースタッフ）としても活動中。

—弁護士や弁護士会に対して、こうして欲しいとか、期待することは何かありますか。

弁護士さんというと、どうしても遠い存在というイメージがあります。何か採め事があったときに、誰にお願いしたらよいのか、どうやって調べたらよいのか、お金はどうなるのかとか、一般市民には分かりにくいです。初めて一見さんのお店に入るような気分だと思います。

—弁護士からもう少し利用する立場に下りてきて、門戸を開いて欲しいということでしょうか。

そうですね。私たちアスリートも怖いとかいうイメージをもたれがちですけど、1回でもコミュニケーションがとれば、印象は大幅変わると思うんです。

例えば、私はあるファイナンシャル・プランナーの方とラジオ番組で一緒させていただく機会があったのですが、銀行に相談に行くのと同じ感覚で気軽に相談されていいんですよという話を聞いて、ああそういうものなんだと。それまでの小難しそうなイメージを払拭できたということがありました。

最近は弁護士さんをよくテレビ番組でお見かけするようになりましたが、ああいった方々は、弁護士さんのイメージを変えていく広報担当のような役割なのかもしれませんね。

—本日はお忙しい中、ありがとうございました。